

知の循環型社会の実現に向けての課題

神 部 純 一
(滋賀大学)

1. 知の循環型社会とは

2008年に中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」が出されてから、「知の循環型社会」の実現に向けての取り組みが、大きな関心を集めるようになってきている。「知の循環型社会」とはどのような社会なのであろうか。ここでは、学びを通して得た「経験」や「知識」を生かすことで、それらを他者と共有し発展させると同時に、活動の中で生まれた課題を解決するために、新たな「知識」を獲得する学びへと戻る、という繰り返しの中で、個人と社会の両面の豊かさを実現する社会だと考えたい。

以下では、この循環型社会の実現に向けての課題について、筆者自身の経験も踏まえながら考えてみたい。

2. 「学び」を「実践」につなげるための支援

(1) 生涯学習の社会的評価

まず、「学び」を「実践」につなげるための支援のキーワードとして、「社会的評価」をあげたい。

生涯学習の成果の生かし方には様々なものがあるが、中には他者によって自らの能力を評価される場面も多く存在する。これまでは、長年にわたって学び、力を蓄えてきたとしても、その力を客観的に相手に示す方法を持たないために、生かす場が狭められてしまうことも多かったように思う。地域にはまだまだ生かされず眠っているすばらしい力がたくさんあるのだ。その力を生かすためには、学習の成果を適切に評価する仕組みづくりが必要である。

この評価に関わって、今筆者が関心を持っているのは、地域における生涯学習の評価機関としての大学の可能性である。現在、「大学等が社会人等を対象とした課程（教育プログラム）を修了した者に対して証明書を交付する「履修証明制度」も開始されているが、滋賀大学では、2005年より大学が独自の「資格」を授与する、「環境学習支援士」養成プログラムを実施してきた。

これは、大学の授業11科目をセットにし、一つひとつの学習に意味や他の科目との関係性を持たせ、それに「実習」と「課題研究」をあわせたひとまとまりの学習を「資格」と結びつけたものである。

社会人は、大学の授業を「公開授業⁽¹⁾」の制度を利用して受講するが、扱いは正規の学生と同じであり、学期末の試験結果も含めて指導教員からの評価を受けることになっている。このことは学習の成果が、時間的な基準（何回出席したか）のみではなく、彼らの学習内容にかかわる理解が一定の水準に達しているかどうかによって評価されることを意味する。これに地域の環境教育機関での「実習」と大学教員の指導のもとで作成する「課題研究」の成果を加えて、所定の要件を満たした者に滋賀大学が「環境学習支援士」という資格を授与するのである。

こうした大学が授与する「資格」は、資格取得者には自らの能力に対する自信を与え、地域にとっては、学習成果の評価として受け入れやすいものではなかろうか。大学が独自の「資格」を授与することで、人々の生涯学習の成果を評価する事例は、近年、少しずつ増えつつある。

（２）仲間づくり

次に、「学び」を「実践」につなげるための支援のキーワードとして「仲間づくり」をあげたい。近年、ソーシャル・キャピタルへの関心が高まっている。ソーシャル・キャピタルとは、「人々のつながり（社会ネットワーク）や

それが生み出す信頼や互酬性の規範といった不可視な諸資源を総称する“傘の概念”(Umbrella Concept)」だとされる⁽²⁾。内閣府は、2002年度にソーシャル・キャピタルに関する調査を行っているが、その報告書の中で「ソーシャル・キャピタルの培養とボランティア活動を始めとする市民活動の活性化は、互いに他を高めていくような関係、すなわち、『ポジティブ・フィードバック』な関係性がある可能性⁽³⁾」があることを指摘した。もしそうならば、学びの過程で、ソーシャル・キャピタルを豊かにすることは、学習成果の活用を促進することにつながる。

筆者は、もう15年「淡海生涯カレッジ」という事業の運営に携わっている。これは滋賀大学と滋賀県の共同研究の中から生まれた学習機会である。1996年に滋賀県大津市で開設され、今日まで、大学の知的資源を生かすと同時に、地域の生涯学習機関（公民館、高校、生涯学習センター等）とのネットワークによって、体系的で、深まりのある環境学習の機会を提供してきた。

「淡海生涯カレッジ」では、特色のある3つの講座が開設され、それぞれの講座内容を受講者がバランスよく学ぶことで学習を深めていけるようにしている。3つの講座とは、身近な環境問題を学ぶ中で、環境についての問題意識を高める、公民館での「問題発見講座」、観察や実験を通して、体験的に環境問題に迫る、高校での「実験・実習講座」、そして理論的に環境問題を深める、大学での「理論学習講座」である。

このうち、大学での「理論学習講座」では、大学教員による講義とともに、受講者が自分たちでテーマを決めて研究を行い、講座の最終回にその研究成果を発表する「グループ学習」を行っている。これには、受講者に、これまでの学習成果を生かしながら自分たちの力だけでどこまでのことができるのかを確認してもらいたい、また、学習のプロセスの中でカレッジ修了後も共に活動を続けていける仲間をみつけてもらいたい、というプログラム企画者の願いが込められていた。

「淡海生涯カレッジ」がスタートして10年目にあたる2005年に、カレッジを修了した人たちが学習成果をどのように生かしているのかを確認するための調査を実施した。その結果、共通のテーマを学び合う受講者同士の交流が、彼らのその後の活動に大きな影響を与えていたことがわかった。カレッジ修了後、地域等で「学習成果をもとに何らかの活動をしている」と回答した人

の率は約7割に及んでいたが、その中には地域の環境関連団体に所属して活動をしている人はもちろん、修了者が中心となってグループを立ち上げ、活動を始める人も多く見られたのである。

その一つの例として、「石山ネイチャー倶楽部」を紹介してみよう。

「石山ネイチャー倶楽部」の創設者の一人であるNさんは、大津校を受講し、無事にカレッジの修了証を手にした。その閉講式の日、同じ地域から通ってきていた2名の仲間と話をしたことが、彼のその後の活動へとつながっていったという。そこで話されたこととは、今までみんなと一緒に学習してきたことがこれで終わってしまうのは残念だということ、せっかくの学びを生かしていくためにみんなで何かサークルのようなものを作れないだろうか、ということであった。Nさんらは、その後1ヶ月程をかけて色々とサークルづくりに向けての検討を重ね、そして「石山ネイチャー倶楽部」が誕生したのである。

「石山ネイチャー倶楽部」では、総会や懇親会等も含め、およそ月1回の例会が持たれ、県内で植物観察会や水鳥観察会等を行っている。また、滋賀大学では学内の農場を使用して「石山っ子ワクワク親子で畑体験隊」を実施している。これは、小学校低学年の児童とその保護者を対象として、農業体験を通して食に関する思いを育てることを目的に行われている栽培体験活動である。「石山ネイチャー倶楽部」のメンバーは、子どもと保護者に対する農作業の指導を担当する事で、滋賀大学教育学部や石山公民館とともに、この事業の企画・運営に関わっている。

この事例からもわかるように、体系的に学び続けてきた自信とともに、カレッジでの学びの間に深めてきた仲間との交流・絆が、学習の成果を実際に様々な形で生かしていく原動力になっているのである。

(3) 非実践者と実践者がともに学ぶ機会

このカレッジの受講者の中には、もうすでに何らかの形で活動をしている人も多く存在する。公民館のような身近な学習施設から高校、大学へと至るカレッジの体系的、継続的な学習プログラムは、学習初心者から実践者まで、幅広い層のニーズを満たす機会として受け入れられているようである。結果として、すでに地域で活動している人がカレッジ修了者の学習成果の活用率

を高めているともいえるが、こうした人たちは、それ以上に活用率を高める大切な役割を果たしているのである。

カレッジは、学習の場であると同時に、実践者とそうでない人との出会いの場、交流の場にもなっている。そこでは、非実践者と実践者が共に集い、それぞれが必要な情報を入手するとともに、受講者同士の情報の交換・交流が積極的になされる。そしてその中で、非実践者は、実践者から学びの生かし方を学び、活用への期待を高めていくことになるのである。人と人のネットワークが、新たな実践者を生み出しているのである。生かし方として、環境関連団体に入会して活動する人の率が高いのも、そうしたことが一つの背景にあるといえよう。

一つの事例として、ある修了者の話を紹介しよう。彼は、カレッジ開校10周年の記念誌の中で次のように述べている⁽⁴⁾。

理論学習に並行してグループ活動が行われたのですが、私は「リサイクルをどう進めるのか」をテーマに選びました。グループの中には、すでにリサイクル活動に熱心実践されている方がおられ、リサイクルについて指導を受け学習しながら研究活動を行ったわけです。中でも、「菜の花プロジェクト」には特に興味を引かれたので、生涯カレッジ修了後迷わず「おおつ環境フォーラム」に入会し、「菜の花プロジェクト」に所属させていただきました。

ここにでてくる「おおつ環境フォーラム」とは、地球温暖化などの地球環境問題や琵琶湖の富栄養化に対応するため、「大津市環境保全地域行動計画」に掲げた取り組みを、市民、事業者、行政機関が力を合わせて推進する組織である。その取り組みの一つに「菜の花プロジェクト」があり、休耕田を利用して、菜種の栽培、出来た菜種油を食用に使い、廃食油から石けん、ディーゼル燃料にリサイクルする取り組みが行われている。こうした活動をしている人との出会いが、彼にとって大きな意味を持ち、その後の活動へとつながっていったのである。

一般には、養成と研修を分けて考える傾向があるが、こうした非実践者と実践者がともに学ぶ機会が、「学び」と「実践」を結びつける重要な役割を果

たすのである。

3. 「実践」を「学び」につなげるための支援

「知の循環」、すなわち「学び」と「実践」を循環させるためには、「学び」から「実践」へ、とともに「実践」から「学び」へ、という両方向の支援を考える必要がある。

以前、筆者が行った調査の中で、「市民がボランティア活動をする中での新しい学習課題の発見経験」について尋ねたことがある。その結果、58.5%の市民が「あった」と回答していたが、そのうちの4割の人は解決のための学習をしていないことが明らかとなった。また、学習をしている人の学習方法をみると、本等を利用した「個人学習」と仲間同士の「相互学習」が主であり、体系的、専門的な学習機会へのアクセス率は低いことも明らかとなった⁽⁵⁾。

今後、「実践」を「学び」につなげるための支援を充実させていくためには、例えば、身近な社会教育施設の中に「学習成果の活用」のための相談や情報提供等が受けられる窓口を設置することが考えられる。こうしたアイディアは、1990年代から国の答申等でも提言されてきたが、残念ながら普及しているとは言い難い。

しかしもし、例えば公民館が学習支援機能と学習成果の活用支援機能を併せ持つことができれば、公民館はまさに「学び」と「実践」の循環システムの要の役割を果たすことになるだろう。そうなれば、実践者は、情報や助言を求めて公民館を訪れることで、地域の学習情報を得る機会が増えるかもしれない。また公民館の職員も、相談者を通して、実践者が抱えている問題は何か、あるいは、これから学習成果を生かそうとしている人がどんな活動分野に関心があるのか等を具体的に知ることができるかもしれない。そのことが、実践者の役に立つ学習機会の創出にも、また実践に結びつきやすい学習機会の創出にもつながっていくのではないだろうか。

注

- (1) 「公開授業」は、大学の正規の授業を市民に公開する制度である。滋賀大学の場合、1科目6,000円で受講することができる。
- (2) 金子郁容, 玉村雅俊, 宮垣元編著『コミュニティ科学—技術と社会のイノベーション』勁草書房, 2009年, p. 39
- (3) 内閣府『ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』2003年, p. 56
- (4) 淡海生涯カレッジ10周年記念事業実行委員会・滋賀大学生涯学習教育研究センター『淡海生涯カレッジの挑戦—学びと生かしの創造, 10年の軌跡—』2006年, p. 91
- (5) 神部純一「学びと活用のリカレントシステムに関する研究」『日本生涯教育学会論集・24』日本生涯教育学会, 2003年, pp. 19-20

参考文献

- 住岡英毅, 梅田修, 神部純一『地域で創る学びのシステム—淡海生涯カレッジの挑戦—』ミネルヴァ書房, 2009年
- 神部純一「大学による独自の資格認定システムの可能性—滋賀大学「環境学習支援士」養成プログラムの取り組み—」日本学生支援機構編『大学と学生(6月号)』時評社, 2008年, pp. 19-24